

せんとうき

館 尖頭器



「尖頭器」とは主に旧石器時代に使われた狩猟具です

旧石器ハテナ館

史跡田名原遺跡

旧石器時代学習館

TEL 042-777-6371

平成 24 年 9 月 26 日

【第16号】

八瀬川探検・魚観察



八瀬川の自然を楽しむ

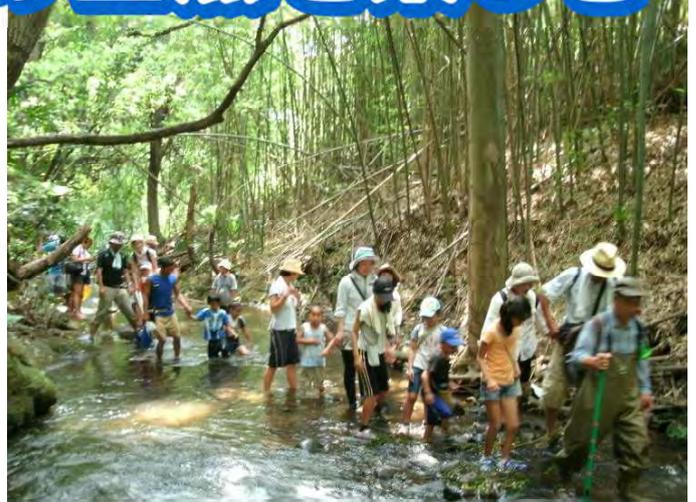
7月29日にハテナ館近くを流れる八瀬川の探検・魚観察を行いました。まず旧石器ハテナ館で出発の集いをして、八瀬川に向かってスタートしました。川の水は冷たく、枝葉の間から洩れてくる日光が爽やかで、オアシスの中での探検となりました。

途中、八瀬川が浸食した右岸崖面に、礫層(河原石の地層)が露出しているところがあります。「この礫は相模川が運搬し堆積したものですよ…」と、職員が説明すると、「川のエネルギーってすごいなあ…」と、感嘆の声があがっていました。

また、河川生物研究クラブの指導のもと、網で魚やエビ等を採集したり、水草の感触を味わったり、大木に触れることができたりと普段味わえない体験ができ、子ども達の歓声が川いっぱいにこだましていました。

採集した生き物は水槽に集め、指導者の小林さんから名前や特徴について説明があり、観察後に川に戻しました。

最後、ハテナ館に集まり探検・観察会のまとめと参加者の感想発表を行い終了しました。終了後に「ハテナ館と地域をつなぐ会」から、参加した子どもたちにゆでたトウモロコシとジャガイモが配られました。「おいしい、ほくほくしてる」と大好評でした。



↑八瀬川探検の様子

＜採集した生き物＞

ドジョウ、ヌカエビ、アメリカザリガニ、アブラハヤ、カワニナ、コシボソヤンマ、コオニヤンマ、サワガニ、ミズムシなど



※八瀬川には「きれいな水」と「きたない水」両方の指標生物がいることがわかりました。

ナイトミュージアム

夜のハテナ館・遺跡公園を体感



↑古墳の中は真っ暗

8月26日、午後7時から今年も「ナイトミュージアムクイズと肝試し」を開催しました。夜、真っ暗な中でクイズと肝試しを交えながら、田名原遺跡やハテナ館について知ってもらうことをねらいとしています。参加者は受付で整理券兼クイズの解答用紙をもらい、館内に3問、公園に3問設けられたクイズを探しながら、暗闇の中を楽しそうに、また真剣な表情で廻っていました。

公園では古墳や竪穴住居の奥まで入らないと答えられないクイズもあり、懐中電灯で照らしながら、恐る恐る入る子ども達の姿が印象的でした。参加者の入園が集中しなかったため、夜の公園の雰囲気をも十分に味わうことができたようです。

6問のクイズに解答すると、ハテナ館のシンボルである「黒曜石」のお土産がもらえ、満足した顔で家路に向かって行きました。

7月と9月に実施した講演会の
内容の一部を紹介します。

講演会報告

テーマ 旧石器時代の石器貯蔵

講師 砂田 佳弘氏
(神奈川県埋蔵文化財センター 主幹)
期 日 平成24年7月14日

■貯蔵とは

石器や鉄製品等がまとめて埋められたところを、欧米ではデポ(仏)あるいはキャッシュ(米)と呼んでいます。日本語では貯蔵・埋納・隠匿の3つの語が当てられています。貯蔵行為をなぜしたのかは、出土状況から見た推論にとどまり、特定することは難しい状況です。

■旧石器時代～弥生時代の主な貯蔵遺跡

①神子柴遺跡(長野県)

旧石器時代終末期から縄文時代草創期。石器の美しさには目を奪われるほどの日本でも珍しい遺跡です。槍先形尖頭器をはじめ磨製石斧、打製石斧が全体で80数点出土しています。石器が重なって集積されていたことから見てデポ的な遺構のようです。

②西昭和2遺跡(北海道)

縄文時代中期。形の整った石鏃が100点以上集中して出土しています。革袋などに入れて貯蔵したようですが、数千年の経過のうちに革袋は腐食して石鏃だけがまとめて残ったと思われる。

③加茂岩倉遺跡・荒神谷遺跡(島根県)

弥生時代。銅鐸や銅矛がまとめて出土し、銅剣は358本も見つかりました。次の戦いに備え貯蔵しておいたのでしょうか。

■田名塩田遺跡群出土黒曜石原石

A地区No.2地点2号ブロックから原石9個がまとめて見つかりました。石器が集中して見つかった1号ブロックから出たのではなく、南西に200mほど離れたところから出ているのが特徴です。出土状態から土坑に貯蔵していたようです。総重量は4029g。分析の結果、全て長野県の星ヶ塔産であることが推定されました。星ヶ塔までは約180kmあり、歩いて数日かかる距離です。運搬中に石の角と角がぶつかり合いできたと思われる傷が見られます。

原石がまとめて出ること、旧石器時代では希少なことです。今年、市の指定文化財になりましたが、わが国にとって極めて重要な遺物です。



田名塩田遺跡群出土の
黒曜石原石9点 ←

テーマ 黒曜石の産地を調べる

講師 望月 明彦氏
(沼津工業高等専門学校 名誉教授)
期 日 平成24年9月8日

●黒曜石とは

ガラス質で、色は黒色ないし灰黒色で赤色や白色が混ざることもあります。割れ口は貝殻状を示します。割れ方の特徴はガラス質と同様、衝撃を受けたところから円錐状に割れ、鋭いエッジをつくります。

●蛍光X線分析法

黒曜石の産地は限られており、成分が産地ごとに異なることを利用して、産地推定を化学的に判定する一つの方法として蛍光X線分析法があります。

黒曜石にX線を当てると元素ごとに違うX線が出てきます。出てきたX線の波長から元素の種類が分かります。同じ産地の黒曜石ならば、元素の比率がそっくりになります。そこで全国の黒曜石を集め、蛍光X線分析によって原産地ごとの元素組成のデータベースを作成しました。遺跡から出た黒曜石を分析して、データベースと比較すれば産地が推定できます。

蛍光X線分析法のいいところは、貴重な資料を壊さないで分析できることです。きれいな尖頭器を、そのままの形で残すことができます。次は分析時間が早いことです。一試料5～6分ででき、一日100試料ほどの分析も可能です。遺跡から出る膨大な出土遺物の分析に最適です。また、操作が簡単で専門家でなくてもできます。短所としては試料が微量であったり、表面が風化していると正しい測定ができないことなどがあります。

●黒曜石の動き

長野県の矢出川遺跡は日本ではじめて細石刃が発見されたところでした。その細石刃を産地分析すると、近くに良質の産地があるにも関わらず神津島産が多く存在すること、産地の分からない黒曜石が含まれていることがわかりました。200kmも離れている神津島の黒曜石がどのようにして運ばれたのでしょうか。最近、産地の分からない黒曜石が静岡県東部の遺跡から見つかっています。これは矢出川遺跡の人々が冬になると、こちらに移動して来たと思われる証拠です。そして帰るときに、天城や箱根産よりも、海を渡ってすでに静岡県に入っていた質のいい神津島産の黒曜石を持ち帰ったと思われる。

●相模原市出土黒曜石の遺跡への搬入形態

中村遺跡の場合を器種別に見ると、箱根産黒曜石の剥片やチップが多く出ています。これは黒曜石が原石のまま運ばれ遺跡内で石器製作されていたことを物語っています。また剥片以外の搔器や尖頭器・削器・ナイフ等は箱根以外の産地(信州系)の占める割合が、剥片やチップの割合に比べて多くなっています。ということは製品や半製品の形で搬入されたことが分かります。